

Highly Sensitive Person は援助要請に消極的か？

——感覚処理感受性と援助要請スタイルとの関連——

岸 美紀 (指導：尾花 真梨子講師)

キーワード：Highly Sensitive Person, Sensory Processing Sensitivity, 援助要請スタイル

問題・目的

日常的で多様なストレスが問題となっている近年、環境刺激(ストレッサー)の感受性の個人差に注目が集まっている。これらの指標は「感覚処理感受性：Sensory Processing Sensitivity (SPS)」, SPSが高い個人は「Highly Sensitive Person (HSP)」と呼ばれている(Aron & Aron, 1997)。HSPは、コミュニケーションスキルの低さや(矢野・大石, 2017)、不安の高さとの関連が認められている(Gearhart & Bodie, 2012)。一方で、ポジティブ情動の喚起のしやすさなどと正の相関が示されている(岐部・平野, 2019)。HSPの適応等を予測するには、SPSと多様な刺激との関連性を検討することが重要になると考えられる。中でも、対人刺激の影響は大きいと考えられるが、これまで十分な検討が行われていない。その中で、他者への援助要請場面には、SPSが影響すると推察される。援助要請のしやすさは、パーソナリティ変数や個人の問題の深刻さ、援助要請の対象など、多様な要因に影響を受けるとされる(水野・石隈, 1999)。

そこで本研究では、SPS/HSPが、援助要請スタイルと関連性があるかどうか、そして、援助要請対象別の援助要請スタイルに影響を及ぼすかどうかを検討することを目的とする。

方法

調査対象者・調査時期 18歳以上30歳以下のクラウドソーシングサービス「Lancers」のワーカーおよび江戸川大学の学生237名(男性110名, 女性124名, 不明3名, 平均年齢25.40歳, $SD=3.99$ 歳)を対象にWeb調査を行った。調査実施期間は2021年5月下旬から6月中旬であった。

調査内容 質問紙は、①フェイスシート(年齢, 性別, Lancersの登録IDと職業または学年), ②Highly Sensitive Person Scale 日本版: HSPS-J19(高橋, 2016), ③援助要請スタイル尺度(永井, 2013)(家族, 友人, 専門家の3対象)によって構成された。

手続き 学外調査は、「Lancers」のサイト内に調査のURLを掲示し、参加者を募集した。また、学内調査は、当該授業終了後に受講生に対して調査への協力を依頼した。

倫理的配慮 本研究は、江戸川大学研究倫理審査委員会の「人を対象とする倫理審査」を受け、承認を得て実施された(承認番号: R03-004A)。

結果

HSPS-J19の平均値+1SD以上をSPS高群, -1SD以下をSPS低群, $\pm 1SD$ 未満をSPS中群として、対象者を3群に分けた。そして、群を独立変数, 援助要請スタイルを従属変数とし、援助要請の対象ごとに分散分析を行った(Table 1)。その結果、家族と専門家の「回避型」に有意な主効果が認められた(家族: $F(2, 234)=3.36, p<.05$, 専門家: $F(2, 234)=3.05, p<.05$)。多重比較の結果、SPS高群が低群よりも「家族回避型」($p<.05$)および「専門家回避型」($p<.05$)に関して、有意に得点が高かった。

考察

本研究の結果から、HSPが援助要請に回避的になりやすい可能性が示された。SPSが高いことで対人刺激に敏感になり、対人関係への不安やストレスが増強されやすいため、援助要請によるストレス負荷を避ける傾向が見られたと考えられる。

また、「美的感受性」は、他の2因子と異なり、援助要請スタイル「自立型」との相関が認められ、その有用性の理解のための更なる検討が期待される。

そして、SPS群ごとで、家族と友人間の援助要請スタイルに差が見られたことから、発達段階や対人関係を細分化した検討の必要性が示されたといえる。

なお、援助要請スタイルはあくまで援助要請時の行動パターンを予測するものだった。今後は、問題を解決すること自体を避けているのかどうかといった目標レベルでの回避についても検討する必要性が示されたと考えられる。

今後は、COVID-19の影響を踏まえた検討や、援助要請の方法を区分した検討、生涯発達の視点からの検討による新たな知見の提供も重要であると考えられる。

引用文献

- Aron, E. N., & Aron, A. (1997). Sensory-processing sensitivity and its relation to introversion and emotionality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 345-368.
- 永井 智 (2013). 援助要請スタイル尺度の作成——縦断調査による実際の援助要請行動との関連から—— *教育心理学研究*, 61, 44-55.

Table 1. SPS群ごとの援助要請スタイルの分散分析および多重比較

	SPS低群 (n = 40)		SPS中群 (n = 151)		SPS高群 (n = 46)		分散分析結果		
	平均値	SD	平均値	SD	平均値	SD	F	偏 η^2	多重比較
家族過剰型	12.98	6.13	11.70	5.96	12.41	6.94	0.77	.01	n.s.
家族回避型	14.23	5.37	16.58	6.00	17.46	6.68	3.36 *	.03	高群>低群 *
家族自立型	19.50	4.34	19.78	4.87	20.41	4.97	0.44	.00	n.s.
友人過剰型	14.18	6.43	11.81	6.10	12.76	7.55	2.22	.02	n.s.
友人回避型	13.70	5.72	16.14	6.67	16.98	7.40	2.87	.02	n.s.
友人自立型	19.25	4.95	19.34	5.42	19.63	5.76	0.06	.00	n.s.
専門家過剰型	13.18	6.57	11.12	6.47	11.96	7.75	1.53	.01	n.s.
専門家回避型	13.33	6.02	15.28	6.55	16.85	7.22	3.05 *	.03	高群>低群 *
専門家自立型	19.80	5.17	18.68	6.12	20.46	6.34	1.76	.01	n.s.

* $p < .05$